

# 明治初年における藩札の一考察

——肥前地域の藩札状況——

長野 暹

- 一、はじめに
- 二、藩札整理政策の概要
- 三、佐賀藩の藩札状況
- 四、小城藩の藩札状況
- 五、対馬藩の藩札状況
- 六、唐津藩の藩札状況
- 七、むすびにかえて

## 一、はじめに

近代的統一国家の形成において、旧来の貨幣制度の整理と新しい通貨体制の構築は、欠かせない要件であった。<sup>1)</sup> 政権の基盤を確定するためには、幕藩期の複雑な貨幣制度を整理して統一的通貨制度を樹立することが必要であつ

たが、この過程を明治初年について本稿では検討しよう。<sup>(2)</sup>

政府は一八六八年五月に太政官札を発行するが、これが不換紙幣であつたことや、政権の基盤が確定していなかったことなどもあつて、流通度は必ずしも高くなかつた。しかし、廃藩置県が準備されていく中で、新しい通貨体制の制定が急がれた。一八七一年五月十日には新貨条例が出された。これは贋札や悪貨の横行に対する諸外国からの強い抗議に対応したものであると共に、<sup>(3)</sup> 廃藩置県による統一的行政体制の形成の基盤を培つてゆくためのものであつた。<sup>(4)</sup>

通貨体制の統一化で欠かせないものに、藩札の整理があつた。<sup>(5)</sup> 多種多様な形で発行されていた藩札は、領国域内を基軸に運用されていたが、幕府が倒壊した明治初年には、特に発行度が高まつた。戊辰戦争の戦費調達などのためのものであつたが、これが貨幣流通に極度の混乱をもたらした。この貨幣流通状況の乱れが外国の強い抗議を受ける要因になつたが、統一的通貨体制の形成には、藩札の整理が緊要の課題となつてきた。この藩札整理の状況を佐賀県について考察し、通貨体制の統一における課題の一端を説明しよう。

佐賀県は、一八七一年には、幕藩期の佐賀藩、その支藩の小城藩・蓮池藩・鹿島藩と唐津藩および対馬藩の領域から構成されていた。<sup>(6)</sup> このうち、蓮池藩と鹿島藩では藩札は発行されていなかったが、他はいずれも発行していた。しかし、藩札の種類や発行数などは異なつていた。このように多様な藩札を整理することは、佐賀県を統一する上で欠かせないことであつたが、それは政府の指令に応じながらも、複雑な地域状況に配慮せざるを得ない側面をも持った。これは政府の出す政策と地域社会との矛盾を示すものであるが、この矛盾がどのようなものであり、また、それが如何なる方向で整理されていったかを検討することは、明治初年の統一化政策と地域社会との対抗関係及び統一の進展度を説明する上で肝要なことであろう。地域社会が政府政策の施行過程でどのような変化を余儀なくされたのか、また、それは如何なる矛盾を形成したのかを藩札の整理の面から検討することは、幕藩制的秩序の

変化と統一政権の基盤形成の様相を貨幣制度の面から解明することになるう。

注(1) 鈴木武雄『財政史』(東洋経済新報 一九六二年)五〇二頁。

(2) 『明治財政史 第十一巻通貨(一)』(吉川弘文館 一九七二年)三一四～三三三頁。

(3) 藤村 通『明治財政確立過程の研究』(中央大学出版部 一九六八年)八四～九二頁。

(4) 廃藩置県に関する研究は進展してきているが、貨幣制度の側面からの検討は少ないようであり、今後の課題の一つであろう。佐藤誠朗『廃藩置県』(講座日本近世史) 参照。

(5) 廃藩置県直後には、佐賀県・小城県・蓮池県・鹿島県・唐津県・厳原県が置かれたが、一八七一年九月四日には、佐賀県と厳原県とが合併して伊万里県となり、県庁も伊万里に設けられた。同年十一月十四日には、小城県・蓮池県・鹿島県・唐津県と厳原県田代・浜崎及び旧幕領も伊万里に合併された。翌七二年五月二十九日には、県庁を佐賀城内に移し佐賀県と改称した。なお、肥前国高来郡と彼杵郡内にあった旧佐賀藩領城は、この折に長崎県に所属するようになり、対馬・壱岐も長崎県の管轄になった。

## 二、藩札整理政策の概要

維新政府が権力基盤を確定するためには、さまざまな対策が必要であったが、その中に貨幣制度の統一という問題があった。

戊辰戦争期に戦費調達のため、諸藩は領内への収奪を強めたが、その手段の一つに藩札の発行があった。幕藩期には、幕府の規制もあって、藩札の発行は制約されていたが、幕府権力の崩壊は、藩財政補填のため諸藩をして藩札の発行に向わしめた。これは貨幣流通を混乱さす作用を及ぼした。このような状況において、維新政府は一八六八年(慶応四)五月に太政官札を発行した。三岡八郎(由利公正)が福井藩で行った産物会所方式の全国的適用とも云われた太政官札の発行は、貨幣流通に一層の混乱をもたらした。太政官札は打歩がつけられて発行する事態に

までになった。一八六八年十二月四日に、政府は太政官札について「時之相場ヲ以通用可致様<sup>1)</sup>」と時価流通を認めざるをえなかった。これを政府は翌年二月三日にも再確認している。<sup>2)</sup>同年四月八日には、「近來金札格外下落人民窮迫ニ立到候儀<sup>3)</sup>」と金札価値が下落しており、これがために「正金金札共不融通ヲ醸シ候次第<sup>4)</sup>」と正金と金札の流通が滞り、また金札よりも「正金ヲ慕ヒ候人氣ニ相成<sup>5)</sup>」と太政官札より正金の需要が多くなって、太政官札の流通が円滑ではない状況にあった。政府は「金札立相場ヲ以取引致シ正金ヲ以仕切売捌トモ不致様<sup>6)</sup>」と金札相場建を指令しているが、このような指令のみで太政官札の流通が円滑に行くものでなかった。

貨幣制度の統一においては、太政官札の整理が必要になってきた。一八六九年五月二十八日に、政府は太政官札の発行限度を定め、新しく発行する新貨幣と交換する方針を打ち出した。「新貨幣鑄造來申年迄之間引替可被下候<sup>7)</sup>」と交換方針を出し、正金との交換で打歩をつけることを厳禁した。新貨幣発行の準備が出来ていた訳でなかったが、太政官札の流通を安定化させるために取られた措置であった。

一八六九年六月六日に府藩県に対して「高一万石ニ付金札二千五百両ツ、石高二応シ割渡相成候<sup>8)</sup>」と石高に応じて二五〇〇両を割り当て「正金ニ換へ<sup>9)</sup>」る方針を出した。正金の集中化を計ったものであるが、その根底には太政官札の不流通性があった。

政府は貨幣制度の統一化を推進するために、新貨幣発行政策を打ち出したが、統一化を更に進めるために、一八六九年十二月五日には「諸藩ニ於テ旧幕府ヨリ許可ヲ受従前製造之楮幣以來其数ヲ増益致シ候儀嚴禁被仰出候<sup>10)</sup>」と幕府の許可を得て発行していた藩札は増発行を禁止し、既発行総高を七〇年十一月までに届け出ることを命じ、一方、「御一新後府藩県ニ於テ楮幣製造之向ハ以來通用停止被仰出候<sup>11)</sup>」と維新以後に発行された藩札の流通も禁止する政策を打ち出した。この政策は必ずしも厳守されなかったとみれるが、藩札の発行は制限されるようになった。一八七〇年十二月二十七日には「諸藩ニ於テ從來製造之札ニタ通ツ、來正月中大蔵省ヘ可差出候事<sup>12)</sup>」と命じた。こう



して、政府は藩札発行の状況を把握しようとした。翌年四月四日には「是迄濫立有之地紙ノ類其外器械等詳細取調封印致シ置早々調書ヲ以処分伺出候」<sup>(13)</sup>と藩札製造用の地紙と器械の封印を命じ、藩札発行が出来ない措置をとった。これによつて藩札整理が一層具体化した。

中央集権的な貨幣制度の確立には、貨幣の統一化が必要であつたが、それには政府による基軸通貨の発行が欠かせないことから、一八七一年五月に、円、銭、厘を通貨単位とした新貨幣を発行する旨を布達した。<sup>(14)</sup>新貨幣には兌換性を持たせ、それによつて信用度を高めて、国内での円滑な流通が目論まれた。さきに太政官札は新貨と交換する方針が出されていたが、藩札も新貨と引き換える方針が出された。

廃藩置県に際して、次の方針が出された。

貨幣ハ天下一定ノ品ニテ有之処、従来諸藩ニ於テ各々種々ノ紙幣ヲ製シ其通用価値区々ニ相成不都合ノ事ニ候、今般廃藩ニ付テハ総テ今月十四日ノ相場ヲ以テ追テ御引換相成候条此旨兼テ可相心得事。<sup>(15)</sup>

と藩札を七月十四日の相場で交換する方針を出した。廃藩置県に際して藩札交換の政策が出されていることは、廃藩置県が一連の政策の上に断行されたと解せられることを示すものであろう。これは翌日七月十五日に大蔵省の布達で、交換相場の設定において詳細な規定が出されたことにも出ている。それは八条に及ぶものであつたが、

従来通用ノ紙幣ハ御一新前後ニ不拘都テ辛未七月十四日ノ相場ヲ以テ追テ御引替可相成ニ付右相場書付早々取調可差出事<sup>(16)</sup>

と七月十四日の藩札相場の報告を求め、また地域に応じた相場場所の設定などについて規定し、

右相場相定候ハ、速ニ其旨各管下細民共マテ不洩様布告イタシ向後右相場ニ付心得違無之様可致事<sup>(17)</sup>  
と相場については布告することを命じた。一方、藩札発行に際しての準備金については、

右紙幣ニ付従来元備ノ引替準備金ハ現高精細ニ取調同様可届出事<sup>(18)</sup>

と現高について報告することを指示している。

同年九月十九日には発行した藩札高、準備金については「別紙雛形ノ通相場準備金ハ勿論御引換可相成紙幣高内譯共早々取調当十月五日迄可差出候事」<sup>(19)</sup>と雛形に基づいて報告書を作成し、十月十五日までに提出することを求めた。

藩札と新貨との交換が打ち出されたが、新貨が発行されていない段階にあつては、一定の方針にすぎなかった。しかし、一八七二年（明治五）一月には新貨の配布が行われ出した。一月二十日に「来壬申年二月十五日ヨリ右各種ノ内差向一円五十銭二十銭十銭ノ四種ヲ発行セシメ追々製造成功ノ都合ニヨリ従来官藩両様ノ金札ト引換候条（中略）各種新紙幣相添此段相違候事」<sup>(20)</sup>と一円、五十銭、二十銭、十銭の新貨を二月十五日から発行し、金札との交換を行つていく旨を告げ、各種の新札を下付した。新貨条例に基づく紙幣発行であつたが、二月十五日からの発行によつて、藩札との交換も愈々具体化するようになった。

発行される新貨は十銭以上の比較的高額であつた。藩札と新貨を交換するには小額のものが必要であつた。これが銅貨であつた。一八七一年十二月に銅貨の発行に関する布達が出された。十二月十九日に旧銅貨と新貨との交換比価を定め、同月二十二日には藩発行の銭札と新貨の銅貨単位との比価について布達した。これは小額貨幣の交換に関するものであつたが、新貨が比較的小額が少なかったことによる。一八七二年（明治五）六月には「新貨幣旧藩製造楮幣価格比較表」<sup>(21)</sup>が出された。

(1) 「法令令書」明治元年十二月四日、第千二十四号。

(2) 同書、明治二年二月三日、第百一、百二、百三号。

(3) 同書、明治二年四月八日、第三百四十三号。

(4) 同右。

(5) 同書、明治二年四月八日、第三百四十四号。

よう。

以上、維新政府の藩札整理方針について若干検討したが、この政策の下での佐賀地域の動向について考察してみよう。

### 三、佐賀藩の藩札状況

- (6) 同右。
- (7) 同書、明治二年五月二十八日、第四百八十一号、四百八十二号。
- (8) 同書、明治二年六月六日、第五百十号。
- (9) 同書、明治二年六月六日、第五百九号。
- (10) 同書、明治二年十二月五日、第千百十八号。
- (11) 同右。
- (12) 同書、明治三年十二月二十七日、第千二十二号。
- (13) 同書、明治四年四月四日、太政官 第百六十七号。
- (14) 同書、明治四年五月、太政官 第百六十七号。
- (15) 同書、明治四年七月十四日、太政官 第三百五十五号。
- (16) 同書、明治四年七月十五日、大蔵省 第十七号。
- (17) 同右。
- (18) 同右。
- (19) 同書、明治四年九月十九日、大蔵省 第五十三号。
- (20) 同書、明治五年一月二十日、太政官 第十五号。
- (21) 同書、明治四年十二月二十二日、太政官 第六百五十八号。
- (22) 同書、明治四年十二月二十四日、太政官 第六百七十九号。
- (23) 同書、明治四年六月、大蔵省 第七十三号。

まず佐賀藩の藩札発行高について検討しよう。

佐賀藩は安政期に大量の藩札を発行し、それでもつて領内の産物を買入れ、長崎で販売して収益をえる政策をとった。軍事力強化のためにとられた政策であるが、維新以後においては、戊辰戦争との関連で藩札の発行を行ったが、これは預り金札の形式をとった。翌年にも札を製造している。これらについて、佐賀県は一八七一年五月に次のような届けをしている。

当県内是迄致施行い金銀楮幣引替支消之目的左之通確定者仕度ニ御座候、尤銅金之義者概相備置い処、御一新前後県内不得止事情有之、一時貸付ケ或者振替ホ之筋ニ遣出シ取纏兼い付、不得止年限ホ差廻シい半而者支消難相成都合有之、尤精細之処者尚又追而御届仕義ニ御座い

一金預り五拾五万三千六百九拾兩余

右者明治二巳年遣出高当辛未十二月迄ニ引替切捨方い、但兼而相備置い準備金ヲ以テ引替可申積ニ御座い

一銀札六拾四万千百拾兩余

右者安政辰年以来遣出シ高、来壬申年ヨリ向四ヶ年乙亥年十二月迄ニ引替切捨可申い、但兼而相備置準備金之内一時貸付振替之遣出シ此年限内取立右金引替可申積、尤不足も可有之い得共、右者精細取調追而御届可仕い

一旧拾五万五千三百式拾兩

右者去庚午年拵立遣出シニ不及分、於佐賀則切捨可申い

一同八万八千兩

右者同年於大阪拵立い分、同所ニ而則切捨可申い

一同地紙一式



一同版本一式

一八七〇年に預金札で五万三千六九〇両が発行されている。現存の預金札をみると、同年六月に銀会所から発行されていることが記されている。一方、銀札は一八五六年から発行され、六万四千二百〇〇両になっている。銀札と預金札の発行数は膨大である。預金札の発行は、戊辰戦争などによって財政的出費が嵩んだことなどが要因になっていると思われる。翌年にも二万四千三百三二〇両が製造されている。これは発行されなかったが、藩札が七一年にも製造されていることは、藩札が財政運営で重要な役割を持つものとして活用されていることを示すものである。

これによると安政期、明治二年に藩札が発行されていることが窺える。安政期における発行高は銀札で六万四千二百一〇両余と大量の発行がなされている。安政期における対外的危機に対応するために軍事を強化したが、この費用調達に大量の藩札が発行された。領内産物のなかでも蠟、石炭の藩札による買い揚げと、産物の領外販売による資金獲得という政策に応じた藩札の発行であった。

一八六九年（明治二）には預札の形式で藩札の発行がなされている。この発行高も膨大で五万三千六九〇両余に及んでいる。一年間にこれだけ大量の藩札が発行されたことから、領内では物価が騰貴し、さまざまな影響が出たとみなされる。一八七〇年には二万四千三百三二〇両余の藩札が製造されているが、これは「遺出ニ不及分」とあり、発行されなかった。

佐賀藩の発行した藩札は、安政期、明治二年のものを合わせると一一万四千八百〇〇両余と膨大な量に及んでいる。維新以前に発行された銀札については銀札製造元帳差出に關して「楮幣製造元帳差出延引ニ付而御届」として、一八八二年六月二十四日に佐賀県は大蔵省に次のように届けている。

元佐賀藩楮幣之内銀札預札兩種有之候処、全預札製造元帳ハ当節引紙ヲ以差出申候、然処銀札製造元帳之義、初発安政期三辰年ヨリ数年ヲ跨數度製造候処、一昨庚午以来藩内改革之振ヲ以、局ヲ転スルコト數度ニ相及ヒ、書

類一切彼是ニ散乱シ、然ルニ又々去辛未冬移庁ニ付テ尚又相混居、依テ当節一同差出候義難相成、追テ取調出来候上御届可申上候得共、先以此段御届申上置候也

銀札については、安政三年からの数年間に掛けて製造し発行されたことが書かれている。このため預札と異なつて製造元帳の整理が順調になされていない旨を届け出ている。

安政三年の藩札事情については、同年六月一〇日に藩請役所から次のような伺いが出されている。

御遣出相成来い米筭之義、月限ホ相立居端々迄致通用、惣而久留米柳川筑前其外之銀札月限ホ無之、余程利方米筭前断之次第ニ而商人共別而難渋罷在い哉ニ相聞いニ付而者、銀札ニ被相改月限ナシニ御遣出相成方有御座間有敷哉奉伺候

佐賀藩は米筭の形態で藩札を発行していたが、安政期には久留米札、柳川札、筑前札などの方が流通度が高い。それは通用期間を限定していないことによるので、佐賀藩も銀札にし、通用期間を定めないで発行することにした。いとの伺いである。

佐賀藩の一八四九（嘉永二）年の米札についてみると、表書は次のようになっている。

（黒印） 覚 戌十月廿九日限  
米売升当酉秋御物成  
之内可相渡い 以上  
西十一月 米会所〇（黒印）

米一升札であるが、一八四九年十一月に発行され、「戊十月廿九日限」とあるように、翌年十月二十九日までの通  
用と限定されている。流通期間が限定されている。これが一八五六（安政三）年の銀札では流通期間の限定がなく  
なり、表書には「預銀式拾目」というように、預銀の表示となり、裏面には、「此切手与銀子引替可相渡也」と書か  
れ兌換を明記している。<sup>5)</sup>

一八五六年の銀札は、それまでの米札と異なつて、紙質と形態においても通貨としての実体を伴つたものとなつ  
ている。

佐賀藩では、藩札の領内流通を強めるために、他藩の藩札が領内に入り込むことを厳しく取り締まつた。年不詳  
であるが、幕末期とみられる「達帳」の中に、

一他領之銀札御領内ニ而取扱ひ者見懸り次第取揚上過銀相懸可申事  
とあり、<sup>6)</sup> 他領の銀札を領内で取り扱うことを厳しく咎めている。

安政期の銀札は「預銀札」であつた。一八七〇年の「預金札」は、この形式を受け継いだものとみなされる。金  
札になつたのは「元佐賀藩造銀札之義、戊辰年五月銀通用停止相成候節」<sup>7)</sup>とあるように、一八六八年五月に太政官  
札が発行されたことによる銀流通の禁止指令に対応したもので、これによつて、両、匁、分の貨幣単位が導入され  
た。

一八六九年の預金札は、預銀札と異なつて銀または金との兌換が明記されていない。兌換のことが預金札に表示  
されていないのは、これが財政補填のための発行であつたことによるとみなされる。札の質も良くなかつた。これ  
は次のような記述にも出ている。

佐賀製藩札之内金預札之義ハ己巳之歳二分金不融用ニ付、一時流通ノタメ致製造候故紙性悪敷  
とあり、<sup>8)</sup> 品質も悪かつたことを記している。

佐賀藩が一八七〇年に製造した藩札について若干検討しておこう。

一八七〇年一月から六月にかけての式分、壹分、二朱、一朱各札の請込数をみれば、表1のようである。これは製造された藩札の引きうけ数であるが、一月七日には式分札が四千枚、壹分札が八千一枚計一万二千一枚の請込である。一月十三日には、式分札が一千枚、壹分札一万九千枚、二朱札一万九千枚計三万九千枚が請込まれている。これが二月に入ると、二月一日には式分札三万枚、壹分札二万四千枚、二朱札一万四千枚計六万八千枚の請込がある。二月十九日には八万枚、同二十九日には八万九千枚の請込みである。大量の藩札が製造され引き受けられていることが窺える。この状況は三月も続き、七月には一万二千枚、十月に七万二千枚の請込みがある。四月には二日に一朱札が五万枚と小額札の請込がある。五月には請込度が多くなり、それは六月にも及び、この月に一八万八千枚も請込まれている。五月に多量の請込があつたのは、藩札製造が進展した結果によるものとみられる。請込まれた総数においては、式分札が二四万九三五七枚、壹分札二八万三八三五枚、二朱札二四万七三九四枚、一朱札七万六六二一枚であり、その総数は一五五万九二二七枚と膨大な数量に及んでいる。一朱札が相対的に少なく、式分、一朱札が二四万台、壹分札が二八万台であり、壹分札がやゝ多いとしても、極端な製造数の差がないことは、式分、壹分、二朱の各札を流通の主軸にすることが目論まれたためであろう。しかし、製造枚数に一朱札を除き極度の差がないことは、発行総額の点からすれば差を生じることになる。式分札は一二万四六七八両、壹分札は七万九五八両、二朱札は三万九二四両とあり、式分札が四割近い比率を占める。一朱札の製造枚数が少なく、式分札が製造額の四割近いということは、預金札の発行が貨幣補填ということでなく、藩財政運営に活用するために目論まれたことによるものであろう。大口取引や多額の支出用に製造されたとみなされる。

このように佐賀藩では、預銀札と預金札が大量に発行されていたが、これらは藩財政運そのために支出されていた。預銀札は四万二五九五貫余り製造されていたが、これは銀六八匁を一両とした場合には金価格で六四万一一〇



明治初年における藩札の一考察

表1 預金札請込の様相

藩札種類 年	貳分札	壹分札	二朱札	一朱札	総枚数
1870年	枚	枚			枚
1月7日	4,000枚	8,000枚			12,000枚
13日	1,000	19,000	19,000		39,000
14日	871	924	7,299	9,044	
19日	25,000	8,000			33,000
23日	24,000	12,000			36,000
2月1日	30,000	24,000	14,000		68,000
19日	36,000	27,000	17,000		80,000
29日	11,000	44,000	36,000	2,000	89,000
3月7日				13,000	13,000
10日	16,000	26,000	28,000	2,000	72,000
4月2日		5,000	24,000	30,000	79,000
12日		1,000	6,000	3,000	10,000
5月11日			40,000		40,000
14日			40,000		40,000
17日	9,000	9,000	6,000	4,000	28,000
19日	8,000	20,000			28,000
21日	8,000	20,000	4,000		32,000
24日	12,000	18,000			30,000
6月1日	32,000	13,000	3,000	2,000	30,000
7日	32,000	28,000	3,000		63,000
8日	486	911	95	621	2,123
合計	249,357	283,835	247,394	76,621	
此金	124,678両 5合	70,958両 7合5勺	30,924両 2合5勺	4,788両 8合1勺 二札五才	231,350両 3合1勺 二札五才

注「明治三庚午年製造之分元佐賀藩製造楮幣元帳写」より作成。

表2 預金札の両替出方と納り

両 替 出 方			納 り			請込役局
午 1 月21日	預金札	1,000両	午 2 月23日	預金札	795両	市庫所
				預金札	205両	
1 月24日	預金札	15,000両	午 2 月 9 日	金	15,000両	巳秋司庫
2 月 2 日	同	21,500両	午 2 月 9 日	金	21,500両	〃
2 月19日	預金札	27,000両	午 6 月 2 日	金	27,000両	〃
2 月20日	同	1,300両	午 6 月 2 日	金	1,300両	〃
2 月10日	預金札	1,500両	午 6 月 2 日	金	3,500両	〃
〃	同	2,000両				
3 月 9 日	同	1,500両	午 6 月29日	金	1,500両	辰秋司庫
3 月24日	預金札	200両	午 6 月 2 日	金	200両	巳秋司庫
4 月 8 日	同	8,400両	午 9 月10日	金	8,008両	〃
4 月18日	預金札	25,000両	午 4 月21日	金	25,000両	辰秋司庫
5 月12日	預金札	3,000両	午 9 月10日	金	3,000両	巳秋司庫
5 月28日	預金札	2,000両	午 6 月 3 日	金	2,000両	卯秋司庫
6 月25日	預金札	6,000両	午 6 月25日	金 札	6,000両	物産局
7 月28日	金 札	6,000両				物産局
8 月 8 日	預金札	399両 3 分				皿山郡会所
8 月11日	預金札	600両	8 月11日	金	600両	納戸
8 月19日	預金札	1,000両	8 月19日	金	1,000両	役内
9 月17日	金	8,000両	9 月17日	預金札	8,000両	鳥雲隊輜重方
9 月18日	金	800両	9 月18日	金	800両	〃
10月24日	預金札	5,750両	10月24日	金	5,750両	巳秋司庫

注「明治三庚午年製造之分元佐賀藩製造楮幣元帳写」より作成。

両余に相当した。この預銀札は大半が軍艦買入れや戊辰戦争費に支出されたことが、一八七二年五月に佐賀県が政府に提出した「旧佐賀藩製造楮幣高」より知れる。「従前製造幣」として、前記の金額を記した後で「金五七万一千四七一両、永七十七文二分」について「是ハ日進艦其外代并戊辰己巳ニケ年内奥羽出兵費用等ニ差出置返弁之目的難相付分」とあり、預銀札の八九％が軍艦買入れと奥羽出兵費用に支出されたことと記している。

この点を両替用に支出された預金札の動向から検討しておこう。

両替用の支出金とその返納状況をみれば、表2のようである。

一月二十四日には、金預札の一万五千両が「右者両替出方」として巳秋司庫に支出されている。藩札が藩財政運営で司庫に両替のため一万五千両が支出されていることは、藩札が重要な役割を持つことを示しているとみれる。この預金は二月九日に返納されている。二月三日には、二万一五〇〇両が両替用として出され、これは六月二日に返納になっている。物産局に対しては、六月二十五日に金預札が六千両が「納ル」とある。これよりすれば、藩札が太政官札で返納となっている。両替用に金預札が出されているが、他には「金札」と記述がないので返納金がどのような貨幣種類で返納になったかは不明である。いずれにしても、預金札が両替用などで活用されていることが窺える。

預金札が藩財政資金として活用されていることは、物産局への支出状況にも出ている。次のような記述がある。

物産局

巳九月十五日元〇（黒印）  
一金札三千両〇（黒印）  
同十九日元〇（黒印）  
一伺 三千両〇（黒印）  
午二月廿九日元  
一金預四千〇（黒印）

（黒印） 順三

金壹万円

右者取替元高ヲ三ツ割ニ、年二三分之壹充其年之十二月ニ可相払、尤利金月ニハ朱ニ、年々皆済可相整請文

まへ

内

未七月廿七日御益之儀者追而相納付事

「金四千両」（抹消）

九月廿五日

金壹万円

右者物産所出切書出を以越方前

此二篇古帳方直ス

これによれば、一八六九年九月十五日に太政官札が三千兩、同十九日に同じく三千兩が支出され、翌年二月二十九日には預金札が四千兩支出されている。一八六九年には太政官札であつたのが、七〇年には預金札での支出になっている。新しく製造された藩札が物産局の運用資金として支出されている。なお、これは月八朱の利金を加えて十二月に返納することが求められている。しかし、これは一八七〇年には出切となつてゐる。

このように預金札は大量に製造され、それが財政運営のために活用されている。一八七〇年に大量の藩札の発行があつたことは、戊辰戦争などで多額の費用を要し、それが財政逼迫をもたらしたこと、財政補填のために支出されたとみなされる。しかも、この膨大な藩札発行も発行基金なしに施行されたこととみなされる。藩札回収政策として、政府は一八八二年、月に準備金の報告を命じたが、それには草文小判が二万二三六九枚、これは一枚金四兩八合五勺として一〇万八四八九兩になり、また、保宋小判が九一二枚あり、一枚が四兩二合五勺替として三万八七二六兩があると報告されている。また、他に式分判が三万一一八兩、二分銀が三八九兩、式朱金が二〇〇兩あり、太政官札も二万五三六八兩あると申請している。<sup>(11)</sup>これよりすれば、草文小判、保宋小判、保字小判など旧幕府正貨が蓄積されており、また、政府が発行した太政官札も計上されている。一八七九年時の正貨保有高は不明であるが、一八八二年の準備金に関する申告状況からすれば、少なくとも額の正貨保有高があつたとみなされる。しかし、安政期の預銀札と異なつて兌換が明記されてい<sup>(12)</sup>ないことから、不換藩札として発行されたと解される。

預金札については一八七一年十月七日に「預金札之義ニ付御届」として、次のように届けを紙幣寮に出している。<sup>(12)</sup>  
元佐賀藩製造預金札之義、裏面佐賀藩之印ヲ押ト不押ト有之如何之譯ニ候哉御問合相成、右者最初藩印ヲ不押發行致候処、藩名無之而不都合ニ付、己巳十月比ヨリ佐賀藩印ヲ押發行致候義ニ有之、尤最前遺出居候分者其儘ニシテ通用致来候、此段御尋ニ付申上候也



これによれば預札は発行当初藩名なしで発行していたが、一八七一年十月頃からは藩名を札裏面に押すようになった旨を記している。準備金を用意して発行されたが、藩名を付さないと社会的信用を保ちがたい状況にあったことが出ている。藩札の価値を維持するためには矢張り藩名を必要としている。

預金札の中で物産基金立金として運用されたものについて、若干検討しておこう。

表3は一八七二年五月に作成された「元佐賀県物産基金立貸下ケ金目安」の内訳である。物産基金から貸付けられた資金のなかで、未返納に関するものなので、これ以外にも貸付けがなされたとみなされる。表からすれば、石炭、陶磁器、茶、塩、素麺の製造や産出用に貸し出されていることが窺える。

石炭では、高嶋炭坑用に一万六一六四両が貸付けられている。高嶋炭坑は一八七〇年からオランダのボードイン商会と佐賀藩が共同経営を行っていたが、この資金に物産基金立金が使われている。貸付は廃藩置県以降の一八七一年九月である。

炭坑経営資金としても運用されている。石炭に関しては、表1には楠久牧嶋と横辺田西郷焼米での石炭採掘のため貸付けられている。

楠久牧嶋については、一万五〇〇〇両が貸付けられているが、その内訳は、

物産基金立金貸付内訳

覚

正金壹万五千両取替ニメ致借用候

但楠久郷牧島石炭掘仕組ニ付月壹部御益附ニメ出炭賣揃代金ヲ以元利共無疎返納可相整義ニ御座ハ、仍而一札如件

表 3 物産基金貸付内訳

金	利息	貸付年月	借用人	用途
金 11,164両 2 合 9 杓 2 札	月 1 分	明治 4 年 9 月	古賀忠四郎	石炭部入用
金 2,100両	月 1 分半	未 3 月	松林公留	
			小川五八	
			嶋半次	〃
			八並次郎助	〃
金 15,000両	月 1 分	3 年 3 月	百武作右衛門	石炭積出シ
金 12,600両		10 月	加賀精作	サンフランシスコ博覧会持越品買入代
金 1,500両	月 1 分	3 年 8 月	吉村謙助	神埼宿素麵仕組
金 6,000両	月 1 分半	4 年 2 月	三好泰介	茶仕組用
			小川五八	〃
			嶋半次	〃
			八並次郎助	〃

注「元佐賀県物産基金貸下ケ金目安并証書写」(「官省進達」明治五年自六月到九月)より作成。

明治三年午二月

百武作治衛門

とあり、石炭採掘のために、一万五〇〇〇両が一八七一年二月に月一分の利息で貸付けられている。物産基金が当時佐賀藩で重要物産であつた石炭の採掘用として支出されている。

横辺田西郷焼米での石炭採掘では、一八七一年三月に三一〇〇両が貸付けられている。この場合、抵当物件として、貯炭された石炭が充てられている。借用書は次のような内容である。<sup>(13)</sup>

覚

正金二千百両受取申候

但焼米其外石炭部入用月々壹歩半益附トシテ当八月限り元利無疎返納可相整候、為引当別紙石炭預り手形壹紙差出申候、尤其内可然注文之者有之候半ハ御売放可被成於然者元利金過不足勘定相成トシテ仍テ証文如件

未三月

小川五八(印)

嶋半次(印)

八益次郎助(印)

三一〇〇両が三月に借入れ、同年八月に返納するとし、利子は月一五%とある。かなり多額の資金の借用がなされている。この折に提供されたのが、志久村、焼米村で採掘した石炭である。<sup>(15)</sup> 左記のような内容である。<sup>(16)</sup>

覚

上石炭六十万斤	志久村
下同式百四十万斤	
上石炭百六十万斤	焼米村
下同四十万斤	

右之通焼米其外出炭相囲置申候、追テ此手形引替現品相渡義ニ候、以上

小川 五八 (印)

嶋 半 次 (印)

八益次郎助 (印)

志久村で採掘された上石炭六〇万斤、下石炭二四〇万斤、焼米村での上石炭一六〇万斤、下石炭四〇万斤が抵当として出されている。しかし、この石炭販売や採掘は円滑でなかったとみられ、一八七二年五月には、まだ一九八〇両が返納されていない。

茶生産では、嬉野、武雄両郷の茶仕組として金六〇〇〇両が一八七一年三月に貸付けられている。両郷では茶生産が以前から行われていたが、<sup>(16)</sup> この特産品の生産に対して資金援助がなされている。

杵島郡白石地域の陶器及び炭焼立用に三〇〇〇両が貸付けられている。同地域は古くからの陶器生産地域であったが、この生産の振興が計られたものとみれる。

山城郷長崎村庄屋伊助に対して塩仕組用として二三五両が支出されている。山城郷は新田開発が幕末期に商人資

本によって行われたが、塩田もこれに関連して造成されていた。この製塩に対しての貸付けであった。

神埼素麵の生産に対して二〇〇〇両が支出されている。神埼地域は素麵生産地として知られていたが、これに対して資金援助がなされている。

佐賀藩用達商武富八郎次に三三八両が貸付残になっているが、武富八郎次は幕末期には海運業を積極的に営み、佐賀藩特産品のなかでも石炭を大阪や長崎に運び販路拡大に当たっていた。

以上のように、物産基金として貸付けられた資金の中で、未返納額から貸付けの内容を検討したが、藩内の特産品生産資金として物産基金が運用されていることが窺われる。石炭、茶、陶器、塩、炭、素麵などの生産資金として活用されている。これら貸付けの多くが、一八七〇年から七一年であることは、殖産興業資金として基金が積極的に活用されていることを示している。預金札の発行もこの時期であったことは、藩札の発行が殖産資金として運営されたことと関連している。

注(1) 「両京大阪長崎案文」明治四年辛未正月ヨリ十二月迄 第六十七号（史料は佐賀県立図書館蔵。以下特に記さない限り、史料は同館蔵）。

- (2) 「官省進達」明治五年自一月到八月 第二十四号。
- (3) 「直正公御年譜地取」安政三年丙辰六月十日。
- (4) 百田米美編『図説佐賀藩の藩札』（九州貨幣史学会 一九八三年）一四〇頁。
- (5) 同書、一五二～一六三頁。
- (6) 「達帳」年不詳。
- (7) 「官省進達」明治五年自六月到九月。
- (8) 同右。
- (9) 「請願伺届書類」明治五年六月。
- (10) 「明治三庚午年製造方元佐賀藩製造楮幣元帳写」。



- (11) 「官省進達」明治五年十一月。
- (12) 同、明治五年自七月到十一月 第七十三号。
- (13) 同、明治七年三月ヨリ五月マテ。
- (14) 「請願伺届書控」明治五年六月。
- (15) 志久村、焼米村の石炭については、「北方町史 中」(一九八六年)二二二、四八六頁、同 下(一九八七年)年表参照。
- (16) 『嬉野町史上巻』(一九八二年)六〇〇、六一四頁。
- (17) 『神埼町史』(一九七二年)五三六、五三八頁。

#### 四、小城藩の藩札状況

幕藩期には藩札を発行していなかった佐賀支藩の小城藩でも、一八六九年に藩札が発行されている。幕藩期には、幕府による制約と本藩との関係から、藩札の発行が行われなかったが、幕府の崩壊と支藩の自立性の進展によって、藩札発行の制度的障害がなくなつたことが発行を可能にさせた。この基礎状況の変化の上に、藩財政の逼迫が藩札の発行を遂行させたとみれる。

小城藩の一八六九年の藩札は、預金札として発行された。

預金札発行の経緯は必ずしも明らかでないが、その間の事情について次のように記したものがある。<sup>1)</sup>

御創業之際府藩県共生産富殖御国内御富強之御基礎可致為興隆厚御仁恤之御趣意ヲ以御施行、石高御拝借ホモ被仰付御趣旨難有奉感戴通用方精々尽力仕得共、免角固陋之愚民疑惑正楮之差位ヲ生シ、別而絶海避遠之民情ハ上同之形状ヲ窺倍狐疑其譴来地方官之不行届難免ト者乍申、御趣意不貫徹処上御廟堂ニモ深致為在御憂慮避邑僻陋ニ至ル迄普通可致様連々御敕令モ有之、

と太政官札発行の趣旨などについて述べたあとで

正椿御引換ヲモ被仰付い折柄尚又碎身粉骨百方説諭ヲ加い得共、遠僻之藩兼而正錢払底ハ御発行之金札過半大札  
ニ而小前之融通困窮現場今日之活動停息終ニ人力ニテ以難通貫事實ニ至リ、

と太政官札は高額紙幣が多いので、人々の間では流通せず、人力では流通を拡められないとしている。太政官札が  
佐賀地域では円滑に流通していなかったことがここに出てくる。このような状況を指摘した上で、続けて

然半秋収之及季節收納方必至窮迫下民歎今更ニ活法無之、不得止情実方一時両全之便宜ヲ計、預券差出い半者第  
一御布告之御趣意モ貫徹仕、前之苦難モ活助可仕一途ニ存込、去巳十二月藩内限式歩以下半朱札右預券発願仕い  
と記している。太政官札の不流通性を補う目的で発行したとあるが、これは恐らく預札発行を合理化するための名  
目であろう。ここで肝要なのは、一八七一年十二月に発行が開始されたことを記していることだろう。逼迫する藩  
財政の補填のための発行をみなすことができる。以上は小城藩での預札発行についてのものであるが、これは佐  
賀藩にも適用できる事情とみなされる。

小城藩が藩札を発行した経緯については、一八七二年八月に提出した報告書に、次のように記されている。<sup>(2)</sup>

一元小城藩紙幣製造無之段庚午二月中御届仕候義ハ、旧幕方許可ヲ請候紙幣之有無御問合ニ付、前断御届為仕義  
ニ御座候、製造之年月ハ己巳十一月中より相始、同十二月初旬より発行仕候、員数者左之通御座候  
金四万四千八百三十四両壹歩式朱

藩札製造は一八六九年十月からで、発行は十二月初旬であり、発行額は四万四八三四両である旨を記している。  
戊辰戦争などによる経費の増大が藩札発行を促進させたとみれるが、その発行種類と各札の発行枚数をみれば、表  
4 のようである。

札種では、二分、一分、二朱、一朱、半朱の五種類であり、発行枚数では、半朱札が二万五〇〇〇枚である外は、

明治初年における藩札の一考察

いづれも四万台の枚数で、比較的均等に発行されている。発行枚数は総計で二万六〇〇〇枚に達する。小藩の発行数としては、決して少なくないとみれる。なお、製造総額の四万四八三四両のうち、三〇九両は「是者製造ノ儘ニシテ散布不致分<sup>3)</sup>」とあり、実際には流通していない。それゆえ、発行された額は四万四五二五両である。

小城藩金預札も兌換について明記されておらず、佐賀藩と同じく不換藩札として発行されたとみなされる。政府の新貨交換のための準備金の内訳をみれば、表5のようである。一八七一年八月段階なので、発行されて一年八ヶ月ほど経った頃の状態であるが、準備金として二万三一九八両が一分銀や太政官札として貯えられていた。引換額三万九一一両に対する比率は約六〇％である。四〇％は新貨との引換手立ができています。

(1) 「官省進達」明治五年自六月到九月。  
(2) 同右。

表4 小城藩製造紙幣高

全額札	44,834両1分2条
内 枚	
2分札	=45,700
1分札	=48,600
2条札	=48,100
1条札	=48,600
半朱札	=25,100

注「官省進達」(明治五年自六月到九月)より作成。

表5 小城預金札引換用備金  
(明治4年8月)

金 額	内 訳
1. 製造預金 札高44,525 両 内 5,414両 差引 残39,111両	御布告ニ付相残居候製造 之札其儘切捨候高309両 2分2朱引テ 追々引換候分 右者引換手残御座候、尤 左之通相備居申候
準備金 金23,198両 永559文 米 5,501俵	一分銀并官札等ニ而相備 居候 明治三年春金 1万912両 永441文ニ当テ本文之通 倉米相備居候

注「小城預金札引換用準備金調」(「官省進達」明治五年自六月到九月)より作成。

## 五、対馬藩の藩札状況

対馬藩は肥前の田代と浜崎に領地を有していたが、この両地にも藩札が発行されていた。発行額は「元厳原管轄田代ニ於テ製造藩札調」<sup>(1)</sup>によれば、銀札で一九五〇貫八八七匁二分五厘製造したとある。札種は十匁、五匁、三匁、二匁、一匁、五分、二分、一分の八種類であった。<sup>(3)</sup>一方、浜崎は「元厳原管轄浜崎ニ於テ製造藩札調」<sup>(1)</sup>より計算すると、一万九百九十七貫五八〇匁ほどになる。なお、浜崎での札は銭札であり、その種類は五〇匁から二分五厘札まで十八種に及んでいる。

同じ厳原藩領でありながら、田代領と浜崎領では、札種が異なっている。前者が銀札、後者が銭札なのは、それぞれの領域における近隣藩領の影響によるものとみられる。田代領は、福岡藩、久留米藩、佐賀藩に近隣し、これらの藩では銀札が藩札として発行されていたので、銀札が発行されたと解せられる。また、安政期には日田商人広瀬久兵衛が発行元となって田代領で銀札を発行したが、これらも影響していたとみれる。一方、浜崎領は唐津藩に接し、文政元年（一八一八）に厳原領となった所で、比較的唐津藩の影響が強かった。唐津藩は銭札を発行していたので、浜崎領も銭札が発行されたとみられる。

藩札の運用について検討しておこう。表6は一八七二年六月調査の「厳原県田代物産基立貸附金調」<sup>(1)</sup>より作成しているが、貸付は一八七一年八月に「職業為基手」<sup>(5)</sup>として貸付られ、「生蠟売捌之上返済」<sup>(6)</sup>とあり、生蠟業者に貸付られている。ところで、表6にあるように、貸付金調では、貸付額が丁銭で記載されている。しかし、これが藩札での貸付であることは借用証より窺われる。表6では蠟屋北村莊平は丁銭六一七四貫文を月六朱の利息で借り受け

表 6 蔵原県田代物産基立貸付金

(明治 5 年 6 月)

貸 付 額	貸 付 日	借 主	
1. 丁 銭 6,174貫文 (高 銭 6,860貫文)	辛未 8 月20日	蠟屋 北村 莊平	是ハ職業為基手貸下ヶ月 6 朱 利息ニテ生蠟売捌追々返済之 積、証書有之
1. 同 6,174貫文 (高 銭 4,860貫文)	辛未 8 月20日	荒木森八	是ハ前同断月 6 朱利息ニテ生 蠟売捌ノ上返済ノ積証書有之
1. 丁 銭 6,741貫文 (高 銭 6,865貫文)	辛未 8 月22日	蠟屋 古賀印兵衛	是ハ前同断月 6 朱利息ニテ生 蠟売捌之上返済之積、証書有 之
1. 同 3,430貫文 (高 銭 4,116貫文)	辛未 8 月24日	蠟屋 古賀与六	是ハ前月数月 6 朱利息ニテ生 蠟売捌ノ上返済之積、証書有 之
合 銭 21,950貫文			
(比 金 3,217兩 3 分 3 朱 永 3 文 7 分 但 1 兩ニ付 銭 6 貫 800文)			

注「蔵原県於田代物産基立貸附金調」(「官省進達」明治五年自六月到九月)より作成。

ているが、北村 莊平の借用証は左記のようである。

覚

一 御銀札六十八貫六百目也

右者職業為基手拝借奉願候処、願之通被仰付難  
有慥ニ受取拝借仕候処相違無御座候、然上者当  
月ヨリ六朱ノ利足相加ヘ元利無滞返納可仕候、  
尤生蠟売捌迄之内納可仕候、就而ハ為引当私所  
持之居屋敷書入仕置、町役張紙一通差上召置候  
間、若万一不納仕候節ハ、右引当御勝手ニ御受  
取被成下、請人ヨリ聊御損分ニ不相成様可仕候、  
依之為後日請人加判証札奉差上候処如件

受 人 古賀印兵衛

借 主 北村 莊平

明治四辛未

八月廿日

銀札六八貫六〇〇目が貸付られているが、これが生  
蠟販売に使われている。表 6 では丁 銭 の貸付けになっ  
ているが、証文からすれば銀札であり、藩札が物産基  
立資金として運用されている。貸付が一八七一年八月



二十日であり、廃藩置県直後であることは、貸付交渉が藩制期に行われていたものとみなされる。

田代領では、幕末期に銀会所と生蠟会所が設けられ、この経営を田田商人広瀬久兵衛が引きうけ、銀札を発行して、生蠟の買付けと販売を行った。広瀬久兵衛は安政六年に経営から手をひくが、生蠟の集荷と販売はその後も行われ、これが今回の藩札貸付の基礎となっていた。<sup>7)</sup>表6にある藩札の借用人はいずれも田代領内の者であることから、一八七一年の物産基金貸付金は、領内者を主体にしてなされたとみなされる。

- (1) 「請願伺届書控」明治五年。
- (2) 「官省進達」明治五年自六月到九月六号。
- (3) 「官省進達」明治五年自七月到十一月。
- (4) 「官省進達」明治五年自六月到九月。
- (5) 同右。
- (6) 同右、「元蔵原県於田代物産基金貸付金証書写」。
- (7) 拙稿「対馬藩田代領における銀会所・生蠟会所と日田商人」(九州文化史研究所紀要)第十六号 一九七三年)

## 六、唐津藩の藩札状況

唐津藩は幕藩初期の寺沢氏の代には天草領四万石を含めて十二万三千石の領地であった。その後、寺沢氏の断絶によって大久保氏に代わり、以後松平、土井、水野、小笠原各氏の譜代大名が統治したが、上地などによって幕末期の石高は六万石ほどであった。<sup>1)</sup>

唐津藩の幕藩期における藩札発行については不明な点が多く、今後の説明が必要であるが、明治初年には、銭札で二〇万両発行した。また、これら銭札は領内への貸付資金として運用されていた。この点を表7から検討しておこう。

表7では、製造切符一万九二〇〇貫目とあるが、これは銭札である。これを金二〇万両であるとしている。この藩札の発行年度は必ずしも明確でないが、明治初年でないかとみなされる。この藩札が一八七一年には四三二貫、翌年には六五貫が支消相済しとなっており、一八七二年には銭一万八七〇二貫、金にして一九万四八一五両があるとしている。このうち、四〇貫余が「民事に渡」として出され、「捕鯨方」に一〇三六貫余、「石炭方」に一一八三貫余が支出されている。また「紙方有」として一四〇五貫が計上されている。捕鯨、石炭、紙は唐津藩の重要産業であつたことから、殖産興業のために藩札の積極的活用が目論まれていた。これは「物産基金有金」として三八八貫余が出ていふことにも現われているとみなせよう。しかし、これら殖産興業資金として支出された額は総藩札額の二五％程度である。これよりすると、藩札二〇万両も大半は藩財政補填のために運用されたと解せられる。唐津藩においても、大量の藩札発行によって、財政を維持しなければならぬ状況にあつたことであろう。

藩札が唐津藩では銭札があつたことは、藩内の基軸通貨が銭であつたことに由来すると解せられる。幕末期の状況から、この点をみれば以下のようなのである。

一八四八（弘化五）年の石炭山における帳簿の内の一片を示すと次のようである。<sup>2</sup>

一銭六貫八百四文<sup>米屋</sup> 東平

但焼石千七百貳俵四文掛り

一同拾貳百三拾貳文<sup>米屋</sup> 小兵衛

但生貳拾四万七千五百斤 七八九月分迄

焼石五百八拾三俵 八九十一月分迄

一回貳貫五百八拾文<sup>松本屋</sup> 源石衛門

但生石七万四千五百斤 八月分 四文掛り

表7 唐津藩の藩札発行と貸付内訳

(明治5年2月調)

1. 藩造切符19200貫目 此金20万両也	
内	
432貫目	昨末年支消相済い分
65貫977匁	当申春支消相済い分
小以切符 497貫967匁	
此金 5,186両2分3朱, 永52文8厘(金1両二付銭9貫600文替)	
残切符 18,702貫73匁	
此金 194,819両1分, 永1,024分2厘	
内	
切符 40貫507匁8分7厘	民来口渡楮幣
此金 422両2分, 永81文5分7厘9毛	
切符 1,036貫416匁8分5厘	
此金 16,796両, 永8分5厘4毛	
切符 1,183貫156匁8分3厘	石炭方渡右同断
此金 12,324両2分, 永50文3分1厘2毛	
切符 9貫目	呼子村江貸渡
此金 93両3分	
切符 388貫742匁9分8厘1毛	物産基立有金, 但金銀楮幣
此金4,049両1分1朱, 永13文3分5厘7毛	
切符 576貫目	百土方渡楮幣
此金 6,000両	
切符 1,405貫92匁2分8厘	紙方有切符
此金 14,633両1分2朱, 永2文9分1厘7毛	
小以切符 4,638貫976匁8分1厘1毛	
此金 48,322両1分3朱, 永237文1分1厘9毛	
残切符 14,063貫56匁1分8厘9毛	
此金 46,490両2分, 永85文3分1毛	
切符 3,536貫730目	紙方有正金, 但準備金見込
此金 36,840両3分3朱	
切符 907両6分	右同数有正錢幣右同数
此金9両1分2朱, 永79文1分6厘6毛	
小以切符 3,537貫637匁6分	
此金 36,850両1分1朱, 永79文1分6厘6毛	
尚残切符 10,525貫45匁5分8厘9毛, 当時遺出之分	
此金 109,640両	
永193文6分3厘5毛	

注 「諸願伺届書控」(明治5年)より作成。

焼石一七〇二俵の代金として錢六貫八百四文が計上されている。他の二例もいずれも錢計算である。ここには錢建で記帳されていることが出ている。日常生活においても錢が使われていることは、一八七一年正月のこととして、<sup>(3)</sup>

一錢六匁 友左衛門山 茂作

一手拭一節 力太郎

一日 平太郎

一匁 徳兵衛

とあり、錢六匁の茂作と徳兵衛への支出が書かれている。日常的な金銭の扱いでは錢が基軸になっていることが出ている。

唐津藩では、錢貨の流通が広くみられたことから、藩札の発行においても錢札として発行されたと解せられる。銀札が北九州地域では主であったことからすると、錢札は特徴的であるが、これは唐津藩が譜代大名領であり、近隣の外様大名領と制度的にやや異なつた状況にあつたことが影響しているとみなされる。

藩札が基軸になつていたことは、政府の発行する新貨との交換用の準備金についての記述からも窺える。<sup>(4)</sup>

<sup>(5)</sup>  
準備金上納御届案

元唐津県造紙弊式拾万両之内、準備相立候金之義、管内小民紙漉稼之者基入等ニ貸代、紙代益金等ヲ以引換候見込相立置候次第も、先般御届仕置候通御座候、然処紙方局江旧年ヨリ積来候益金等別紙之金数有之由ニ而旧官ヨリ別付成ルニ付、今般上納相加へ候義ニ候、当紙幣準備差引精算巨細之儀も追而御届仕義ニ御座ル也

壬申  
九月 佐賀県権参事伴正臣

芳川紙幣頭殿

唐津藩が発行した藩札は二〇万両あり、このうち紙漉稼の者に基入金などで貸付け、紙代益金などで納めさせてき

た益金を上納したい旨を記している。藩札が起業資金のために貸付けられており、その回収は利益金からの上納によって整えている。この積金は、

金四万四千九拾壹両、永五百四拾七文三分三厘

内

金四万〇八百五拾八両、永八百三拾三文三分三厘

右も藩札

金四千一百三拾貳両、永七百拾四文

右金札正銀合

とあり、四万四九一兩に及んでいる。このうち藩札は四万八五八兩である。藩札が殆んどある。貸付と返済が藩札で行われている。この藩札が四万兩余り蓄積されており、これを藩札と新貨引換金のものに使用したいとしている。

一八七三年に提出された「元唐津県準備金目安」がある。その内訳は表8のようである。五万九一五兩が準備金として以前に届け出たもので、更に紙方局の積金四万四九七五兩が準備金に加えられている。その総額は九万五八九〇兩になっている。しかし、準備金といっている多くが藩札であったことは、錢札九六匁を金一円に換算して藩札三九一一貫余が四万八四四兩になるとしていることにも出ている。準備金といっても、これは新貨引換用の準備金であり、いわゆる藩札発行に際しての準備金ではない。準備金九万五八九〇兩も九万四五五一兩が上納されている。この部分だけ藩札が少なくなり、新貨との引換額の減少になっている。

（注1）「唐津市史」（一九六二年）四七八頁。

（2）「石炭山役所村益地質年々渡調帳」（弘化五年戊申二月より）。（資料は佐賀県東松浦郡相知町所在の相知町立図書館蔵の『峯

明治初年における藩札の一考察

表 8 元唐津県準備金目安

金 額	内 訳
1. 金 50,915両, 永295文	是者準備金最前御届高
1. 同44,975両, 永287文 4 分	是者紙方局積金旧官員ヨリ引付候ヲ準備金ニ相 加候分
小以金 9 万890両, 永582文 4 分 内	
金 49,576両, 永75文 2 分	是者壬申 5 月上納ノ分
同 44,975両, 永287文 4 分	是者元唐津藩銭札3,921貫117匁5分, 金壹兩ニ付 銭札96匁替ニシテ此金40,844両, 永 9 両73文9 分, 尙又金札正金銀等取交4,130両, 永313文5分 入テ本文之通り壬申10月上納ノ分
小以金 9 千551両, 永362文 6 分 差引	
残金 1,339両, 永209文 8 分	是ハ紙方仕組起方金ヲ以テ追テ上納可仕分

注 「官省進達」(明治六年向一月到二月第十六号) より作成。

家文書」。

(3) 「石山日誌」(慶応2年卯正月)(史料は同右文書)。

(4) 「官省進達」明治五年自七日到十一月。

(5) 同右。

## 七、むすびにかえて

肥前地域における明治初年の藩札状況について、若干の検討をしてきた。一八六年五月に政府が銀目廃止の通達を出したことから、銀目の通貨体制が否定された。このため、新たに発行された藩札は、佐賀藩においては金札であった。佐賀藩においては、銀札が流通していたことからすると大きな転換であった。戊辰戦費の調達などのために、膨大な金札が発行されていた。また、幕藩期には藩札を発行していなかった小城藩で金札が発行されたことは、藩財政の窮乏が進み、その補填策として藩札が発行されたとみなされる。佐賀藩、小城藩の状況からして、明治初年においては、藩財政が極度に行き詰まっていることが窺える。

藩札はまた特産品基金として活用されていた。特産物生



産をはかるために貸付けられているが、藩札全体からすれば矢張り戊辰戦争の戦費調達が主であった。

明治初年の貨幣状況は、銀目廃止通告にも拘わらず、幕藩期の通貨体制が基本的に存続しており、政府が発行した太政官札も流通度は低かった。対馬・厳原藩領の田代と浜崎では前者が銀札、後者が銭札が発行されていたことは、藩札が地域によって異なった流通体制にあったことを示している。これが貨幣流通の混乱を生みだす要因でもあった。

銀目廃止の通達によって、佐賀藩が従来の銀札ではなく金札を発行したことは、通貨政策が一定の効果を持ったことを示しており、通貨整理においても、一定の基盤が培われつつあることを意味するものである。

藩札整理は新貨条例の発布によって、新しい段階になるが、肥前地域の金札、銀札、銭札の流通と信用度の相違など多様で複雑な状況にあった藩札を新貨幣との交換などによって整理することは、そうたやすいことではないが、これを次稿で検討することにしよう。